

史跡『馬高・三十稻場遺跡』隣接地

—環境整備事業に伴う発掘調査—

1999

長岡市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、史跡「馬高・三十畝場遺跡」の隣接地（新潟県長岡市関原1丁目字中原）に計画している見学者用駐車場建設に伴う発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査の経費は、長岡市の一般財源からの支出である。
- 3 発掘調査は、長岡市教育委員会が調査主体、長岡市教育委員会職員の駒形敏朗が文化財保護法上の調査担当者として平成10年9月から10月にかけて行った。発掘調査の体制は、次のとおりである。

調査主体 長岡市教育委員会

調査担当者 駒形敏朗（科学博物館副主幹）

調査員 鳥居美栄（科学博物館学芸員）

調査補助員 相田智子（新潟大学卒業生）

発掘作業員 長岡市民

調査事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 渡辺 央）

- 4 発掘調査の遺物、遺構の測量図面・写真等の記録類は長岡市教育委員会が保管している。
- 5 遺物出土位置等の記入は、UTP（今回調査地の略称）-取上げ番号-グリッド（もしくは遺構番号）-出土層序の順である。
- 6 本報告書は、駒形が鳥居、相田、整理作業員の補助を受けて作成した。
- 7 掘図のうち、地形図などで方位を示していない図面は、真北を上にした。また、遺構図などに記入してある方位は磁北を指す。
- 8 遺構断面図の水準線脇の数字は、標高をメートル単位で表したものである。
- 9 発掘調査から本報告書の作成まで、馬高・三十畝場遺跡保存会、関原土地改良区をはじめ、多くの関係者から御指導・御協力をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

目 次

1はじめに	1
2馬高遺跡	1
3環境	2
4調査の経過	4
5土層序	4
6遺構	4
7遺物	7
(1)縄文土器	7
(2)土製品	11
(3)石器	12
8まとめ	15
報告書抄録	16

挿図目次

第1図 史跡「馬高・三十種場遺跡」及び周辺の縄文中期遺跡	2
第2図 馬高遺跡と発掘調査区	3
第3図 発掘区の概要図及び土層断面図	5
第4図 遺構図	6
第5図 縄文土器(1)	8
第6図 縄文土器(2)	9
第7図 縄文土器(3)	10
第8図 土偶・三角形土版・石獣	11
第9図 石器(1)	13
第10図 石器(2)	14

写真目次

写真1 調査地・発掘風景	17
写真2 遺物出土状況・遺構	18

1 はじめに

国史跡『馬高・三十稻場遺跡』は、通称「閔原丘陵」と呼ばれる信濃川左岸に広がる河岸段丘上に位置している。閔原丘陵を含む地域は西部丘陵地帯と総称され、この一帯には馬高・三十稻場と同じく国の史跡に指定された藤橋遺跡をはじめ、多数の縄文遺跡が所在している。また、西部丘陵地帯には縄文晩期集落の一部を復原展示した藤橋歴史の広場、縄文文化を一つのテーマにした（仮）新潟県立歴史民俗文化館、「縄文の里」構想を取り入れた国営越後丘陵公園などの縄文文化関連施設があり、多数の縄文遺跡とともに縄文文化ゾーンを形成している。

馬高・三十稻場の公有化は、地元の馬高・三十稻場遺跡保存会から火塚土器出土と伝えられる地点を中心とした範囲の寄付を受けたのをはじめ、文化庁と新潟県からの補助を受けて行い、平成9年度には指定地の公有化が完了した。長岡市教育委員会ではこれを受けて、遺構の復原や露出展示などを通じて、市民に生きた縄文文化に触れることのできる施設を目指して、遺跡環境整備事業の準備に入った。今回の調査は環境整備事業の第一歩として、来年度に予定している駐車場整備に先立つ事前の発掘調査である。

なお、駐車場は、史跡地の東側に隣接して、国道8号線から（仮）新潟県立歴史民俗文化館を通り、国営越後丘陵公園へ通じるニュータウン中央線につながる市道（西幹線77号線）とに挟まれたところに計画したもので、史跡を訪れる見学者の利便に供する目的で整備するものである。

2 馬高遺跡

史跡『馬高・三十稻場遺跡』は、遠藤沢と呼ばれる閔原丘陵を南から北へ流れる小沢を挟んで、東にある縄文中期の馬高遺跡と、西に位置する後期の三十稻場遺跡を合わせて、史跡に指定されたものである。馬高・三十稻場は、明治のころから土器や石器などが採集される遺跡として知られ、地元の素封家である近藤家が中心になって発掘や遺物採集を盛んに行ってきたところである。そして、1936年の大みそかには近藤家の篤三郎が、源助畑で大形土偶とともに、後に重要文化財に指定されることになる火塚土器を発掘したと言われている（中村孝三郎『馬高No1』長岡市立科学博物館 1958年、中村孝三郎『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館 1966年）。また、馬高から出土した土製の耳飾について、近藤家の勘治郎・篤三郎親子が数編の論文を発表している（近藤勘治郎・篤三郎「越後馬高と滑車形耳飾」「考古学』第7巻第10号 1936年、近藤勘治郎『三島郡馬高に於ける石器時代、附、滑車形耳飾りに就いて』『高志路』第3巻第6号 1937年）。

戦後、馬高と火塚土器が広く知られるようになったのは、中村孝三郎が近藤家の調査資料などから『馬高No1』（中村 前掲書）を著してからである。そして、1972年に長岡市教育委員会が馬高と三十稻場でボーリング調査（中村孝三郎『新潟県長岡市閔原町 馬高・三十稻場遺跡調査報告書』長岡市教育委員会 1973年）を行って遺跡の範囲を推定し、1979年の国史跡の指定範囲の参考になった。ボーリング調査は検索棒で遺構（主に石組垣）や土器の密集地点などを探るもので、その資料は、1990年の道路計画に伴う試掘調査を担当した小熊博史が連環の馬高集落の推定するのにつながった（小熊博史「馬高遺跡ースベースネオトビア関連道路に伴う確認調査報告書－」長岡市教育委員会 1991年）。第2図は小熊が作成した馬高集落の推定図に、今回の調査地（駐車場用地）を書き加えたものである。今回の発掘調査地は、これから推定馬高集落の東縁辺部に相当する。なお、1995年に今回調査地の東側を通過する市道を発掘調査し、遺構はなく、遺物も土器がごくわずかしか出土しなかったことを確認している（駒形敏朗「史跡『馬高・三十稻場遺跡』隣接地－市道建設に伴う発掘調査報告書－」長岡市教育委員会 1996年）。

3 環境（第1図）

長岡市の中央部を北へ流れる信濃川は、県境の中魚沼郡津南町から左右両岸に数面の河岸段丘を発達させている。馬高・三十稲場遺跡がある信濃川左岸の関原・三島地域には、上位から高寺面、関原面、上富岡面、深沢面の4面があり、馬高・三十稲場は上位から2段目の関原面に位置している。遺跡がある信濃川左岸の丘陵は、洪積世の高寺面・関原面・上富岡面の3面を総称して「関原丘陵」と呼ばれることが多い。遺跡はこの関原丘陵を解析するように南の八石丘陵から流れ出た遠藤沢によって、東西に集落域が分けられている。東は中期の馬高、西は後期の三十稲場である。今回調査地の標高は約61mである。

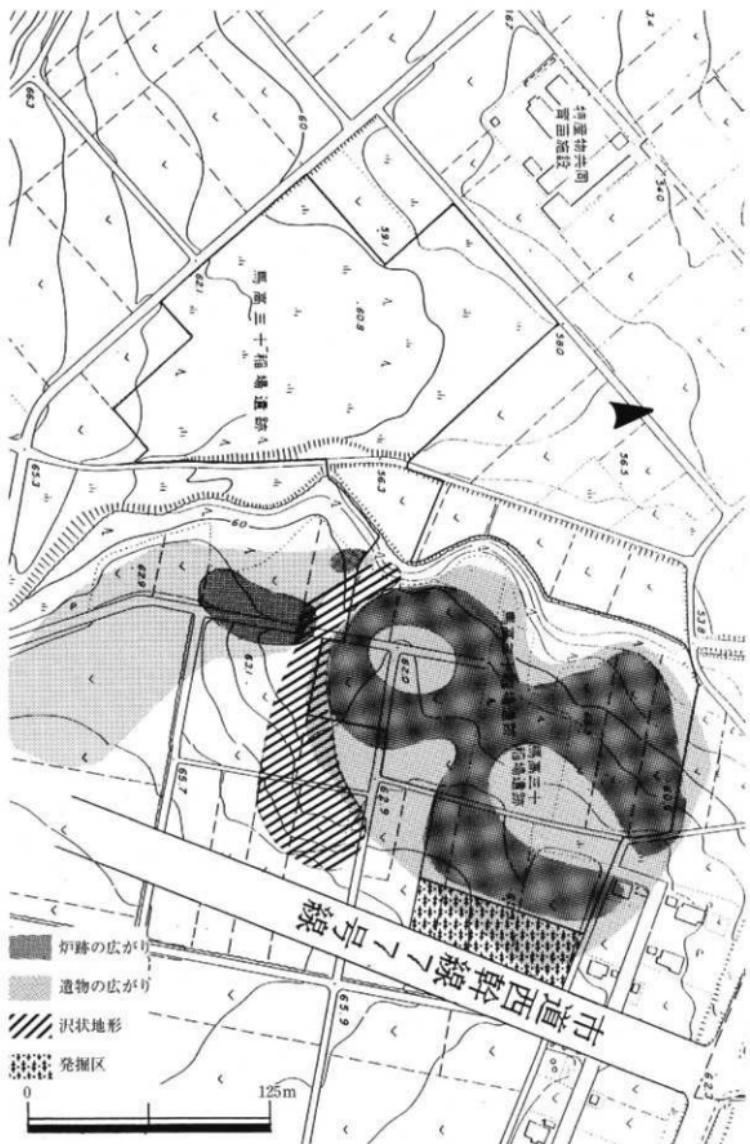
馬高・三十稲場と同じ河岸段丘の関原面で、馬高から南方約4kmのところに繩文中期から後期の岩野原遺跡がある。岩野原は、面積が40,000m²を超える集落跡で、10mほどの遺構空白部を挟んで中期と後期の集落エリニアに分かれ、中期・後期ともに80軒ほどの住居跡が位置していた（胸形敏朗・寺崎裕祐「岩野原遺跡」長岡市教育委員会 1981年）。馬高・三十稲場と岩野原は、面積や集落の存続期間の長さ、住居跡



第1図 史跡「馬高・三十稲場遺跡」(■) 及び周辺の繩文中期遺跡 (●)

並びに(仮)県立歴史民俗文化館 (▲) 位置図 (1/50000、長岡)

1 瓜削、2 三ノ輪、3 南原、4 岩野原、5 笹山、6 史跡「藤橋遺跡」(繩文晩期)



第2図 馬高遺跡と発掘調査区

の軒数、それに土偶をはじめとする呪術的な遺物の多さなどから、地域の拠点的な集落跡と考えられる。

縄文中期に限って閑原丘陵に展開する遺跡を見ると、馬高から東約1.5kmには中期中葉の南原遺跡、馬高の周辺には瓜割遺跡、三ノ輪遺跡などが、岩野原の近くには笹山遺跡、馬高と岩野原の中間に松山遺跡などがある。南原は昭和30年代前半の公営住宅建設で遺跡の大半が削平されていたが、1993年の発掘調査で土偶が10数点出土するなど馬高や岩野原に次ぐ規模と考えられる集落跡である（駒形・外「南原遺跡」長岡市教育委員会 1994年）が、瓜割は1基の石組炉（駒形『瓜割遺跡』「長岡市内遺跡群発掘調査報告書」長岡市教育委員会 1991年）、三ノ輪は1軒の堅穴住居跡（駒形『三ノ輪遺跡』「長岡市内遺跡発掘調査報告書」長岡市教育委員会 1997年）、笹山は土壙が1基（寺崎・外「笹山遺跡」長岡市教育委員会 1981年）が発掘調査で確認されているだけの、キャンプサイトと考えられる遺跡である。閑原丘陵には馬高や岩野原の拠点集落と、それに次ぐ南原を中心とした、瓜割・三ノ輪・笹山などの小規模の遺跡が衛星のように取り巻き、これらの遺跡群で閑原丘陵における縄文中期の社会を構成していたものと考えられる。

4 調査の経過（9月1日～10月13日）

今回の発掘調査は、1990年の試掘調査や1995年の市道建設の事前発掘調査から、調査対象地は遺構・遺物が希少であると推定され、バックホーで表土から地山面までを発掘し、遺物が出土した場合は人力で発掘することを原則として調査を進めた。また、地山面での遺構確認作業は人力で行うことは通常の発掘調査と同様である。

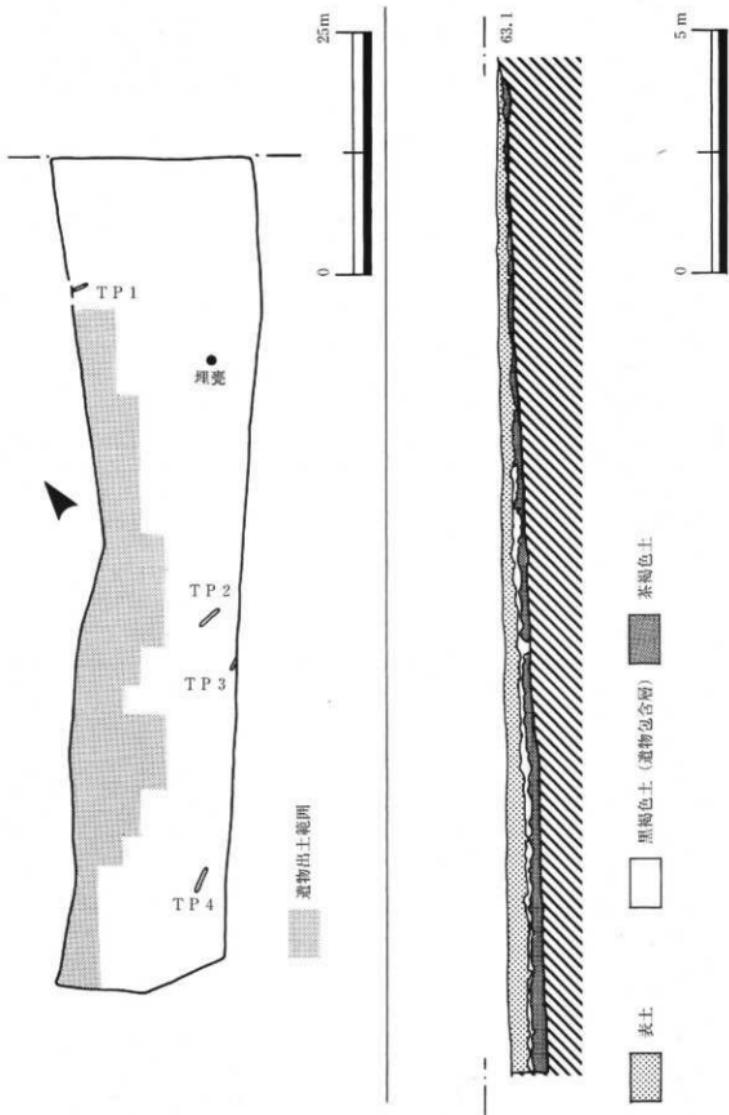
今回の調査は調査の前に夏草をバックホーで除去することと、調査事務所の間設及び調査機材の搬入などの事前準備を平行して行い、人力での遺構確認作業は9月8日から始めた。そして、遺物包含層の発掘、遺構確認作業、遺構の発掘、遺構の写真撮影、土層断面の実測、遺構の測量など、必要な調査を行って10月13日に、遺物や調査記録類、調査機材を整理室に収納して調査を終了した。

5 土層序（第3図）

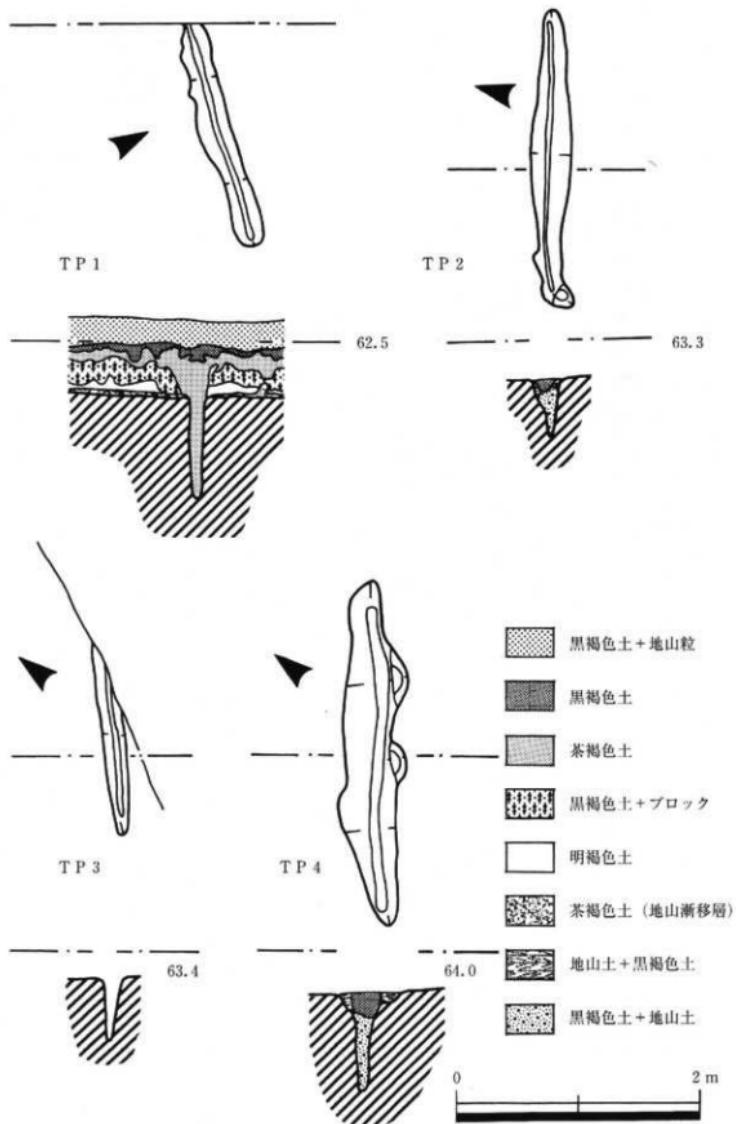
調査地の基本上層は、表土、黒褐色土、茶褐色土、地山である。遺物を包含する土層は黒褐色土で、調査区の東寄りの中央部から西の指定地に見られ、それにつれて遺物の出土が多くなる。地山面は東から西へ傾斜し、地山面までの土層堆積も厚くなる。なお、第3図の左図は、縄文土器などの遺物が出土した範囲をスクリートーンで示したものである。土器の分布状況図は、第2図の集落推定範囲にはば重なり、調査地が集落の縁辺部であることを示している。

6 遺構（第3図・第4図）

遺構は、縄文土器の出土範囲の外側に位置する4基の細長い溝状のトラップビット（Tビット）だけである。Tビットの長さは、全体形状が発掘された2・4は1.25m（TP2）と1.4m（TP4）、最大幅は約30cm（TP2）と40cm（TP4）で、4基のTPの深さは一番浅いTP2で50cm、深いTP1・4で約80cmであるが、調査区外にTビットの一端が伸びているTP1は、地山面の上約30cm上の黒色土から掘り込まれていることが土層断面から観察された。これからTP1の本来の深さは1.1mであることが確認され、深さにバラツキが見られる。遺物は縄文中期の土器の小破片が出土しただけである。Tビットは、指定地外で縄文土器の出土集中域の外側に位置することから、集落の外周部に設けられる落とし穴の機能をもっていたものと思われる。



第3図 発掘区の概要図及び土層断面図



第4図 遺溝図

7 遺物（第5図～第10図）

今回の発掘調査で出土した遺物の位置は、指定地寄りの西側に片寄っており、それ以外の位置からの出土はほとんど無かった（第3図左図）。出土遺物の種別と量は、巻末の報告書抄録掲載のとおりである。遺物の種類と出土量は少ないが、その中でも加工具の打製石斧と磨製石斧のそれぞれ10点以上、調理具の凹石の20点以上の出土量の多さが目立つ。

（1）縄文土器（第5図～第7図）

土器は縄文中期中葉を中心として、前葉、末葉、後期の上器が出土している。なお、中期の上器分類は東北南部地方の大木式土器様式の段階ごとに大区分し、次に地域系統で細分した。

①中期前葉大木7b式段階の土器（第5図1～12）

この段階は、口縁部ないしは頭部に爪形文が施された北陸地方の新崎式系土器だけで、大木式土器系統の上器は出土しなかった。2・3は平口縁に沿って1条の爪形文を巡らし、その下に縄文が施されている。4は山形口縁の土器である。5～8は細かい押し引きの爪形文と粘土紐を張り付けたモチーフが特徴的な土器である。7の爪形文の下部は蓮華文風になっている。

②中期中葉大木8a式段階の土器（第5図13～第6図）

この段階の土器は、北陸系土器と、信州の焼町系統の土器、東北系の土器、それに火塙形土器などの在地の土器がある。中葉の土器の出土量は、在地の火塙形土器が主体的である。

・北陸系の土器（第5図13～25）

13～17は口縁が「く」の字に折り曲がる浅鉢で、北陸地方の中期前葉の新崎式から中葉の上山田・天神山式に移行する時期の土器と思われる。14～17は、半隆起線に押された中に押し引きの刻目文が施されている。13は押し引きによる列点文が口縁部に施されている。

18～25は、上山田・天神山式に比定される深鉢土器で、半截竹管の沈線に施された爪形文が変化した押し引きの刻目文が特徴的である。20は波状口縁になるものと思われる。22はキャリバー形土器の口縁部破片で、渦巻きから伸びる横S字文に刻みが加えられている。23は平口縁の深鉢で、口縁に立体的な渦巻文を施している。

・信州系の土器（第5図26）

渦巻文がくずれた横格円区画を沈線で描く文様で、信州の焼町系統でも古手の土器である。今回の発掘では、この1点だけの出土が確認されている。

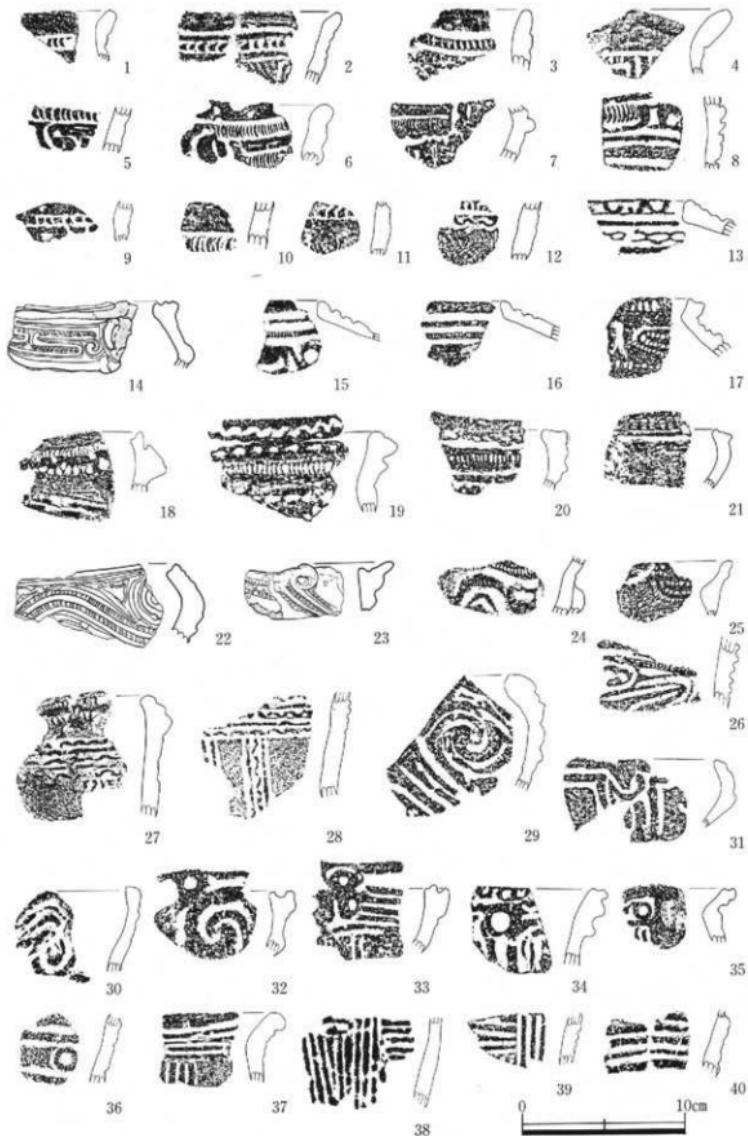
・東北系の土器（第5図27・28）

やや内面に傾斜する口縁をもつ深鉢土器で、交互刺突による鋸歯状文が頭部と、胴部に施文されている。口縁部から胴部破片の27と、頭部から胴部の28は、同一個体の土器である。立体的な文様の鋸歯状文は、頭部では横位であるが、胴部は縄文を地文した上に縦位の平行沈線内に1条の鋸歯状文が施文されている。大木8a式段階の中でも古い段階の土器である。

・在地の土器（第5図29～40、第6図）

在地の土器とした中には、火塙土器様式の外に渦巻文と平行沈線文の土器がある。29～36は渦巻文の土器で、29・31は山形口縁の深鉢土器、31は平口縁のキャリバー形土器、32・33は口縁から口唇部にかけて渦巻文が施されている。37～40は平行沈線を束にして横位と縦位に描く土器である。

第6図には、火塙形土器と王冠形土器の一例をまとめた。41・42は王冠形土器の把手部分で、41には渦



第5図 繩文土器（1）

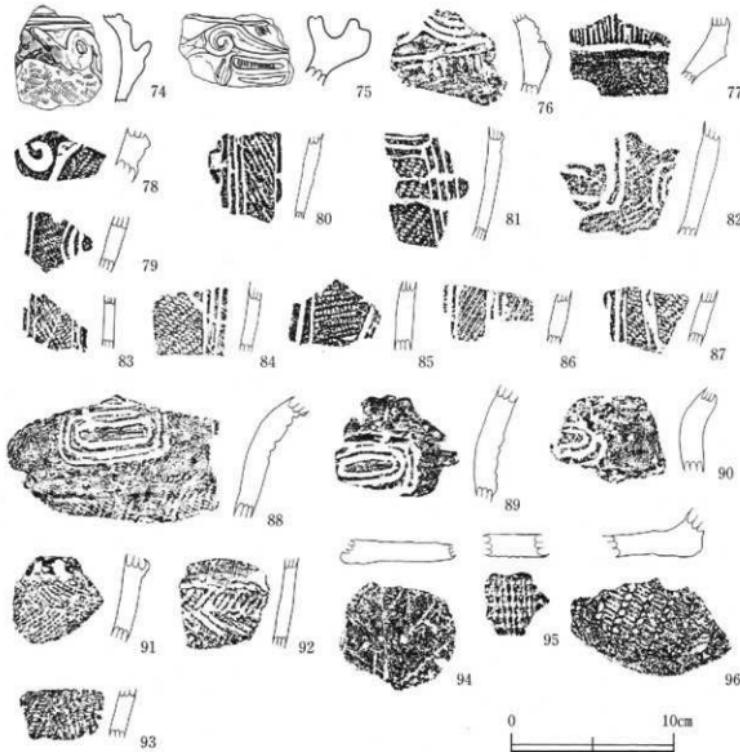


第6図 縄文土器 (2)

巻文が施されている。42は内反りを呈する把手に沿って沈線が施されている。

43~52は火焔形土器の把手から口縁部の破片である。実測図でトーンの部分は立体的な装飾がはがれた痕跡を示した。43は火焔形土器の口縁から鶴冠状把手の土器で、形状から若干小形の火焔形土器と思われる。44は鶴冠状把手、45・46は口縁に突き出る鋸歯の部分である。46・51は口縁に袋状の装飾をもつもので、46の鋸歯には刻目文が施されており、火焔土器様式の中でも若干古い様相を呈している。

53~61は火焔形土器や王冠形土器の頸部から胴部にかけての破片で、頸部から胴部上半部には半隆起線による渦巻文が施されている。真ん中の半隆起線は、隆起が若干高くなっている。62~73は火焔形土器や王冠形土器の胴部から底部にかけての破片で、半隆起線が縱位置に施されている。中には62や63のように交互に刺突してB字状の半隆起線を施す例もある。また、68や72のように数本の半隆起線の1本を周りより一段高くしているものもある。



第7図 繩文土器（3）

③中期中葉大木 8 b 式段階の土器 (第7図74~87)

口縁部に劍先文をもつ渦巻文を施し、胴部に縄文を地文として縦位の平行沈線文を描く土器のグループである。口縁部破片の75は、渦巻文から劍先文が伸びる文様モチーフが特徴的で、劍先文の下には刻目文が見られる。74は口縁部から胴部の土器破片で、口縁部に渦巻文が、胴部に縄文が施されている。76・77は逆「く」の字に折り曲がる頭部から胴部上半部の上器で、76は渦巻文から派生する曲線が沈線で描かれ、77は曲線の下に描かれることが多い縦位の沈線文が施されている。78・79は渦巻文が施されており、胴部破片でも上半部の破片である。81も縦位の平行沈線が見られ、胴上半部の破片であろう。80・82~87は縦方向に平行沈線が施された胴部の破片で、82には長方形の区画文が沈線で描かれている。

この段階の土器は、劍先文をもつ渦巻文が特徴的な東北地方の大木 8 b 式の影響が見られる土器群であるが、大木 8 b 式の中でも古い部分に属するものと思われる。

④中期後葉大木10式段階の土器 (第7図88~90)

器形は頭部から口縁部が大きく外反する深鉢上器で、口縁部から頭部の無文地に沈線で長方形の区画文を描いている。ここに図示した3点の破片は同一個体と思われる。在地系の土器であろう。

⑤後期前葉の土器 (第7図91)

口縁に近い位置の破片で、コブが張り付けられている。刺突文が特徴的な後期前葉の三十桶場様式土器の中でも古い段階に属する在地の土器である。胴部には斜縄文が施されている。縄文だけの93も、器壁の厚さや縄文施文の手法などからこのころの土器と思われる。

⑥後期中葉の土器 (第7図92)

羽状縄文が施された土器で、中期や後期前葉の土器と比べて器壁が薄い上器である。おそらく後期中葉の三仏生式土器段階の土器であろう。

馬高からはこれまで後期前葉の土器は出土しているが、中葉段階の出土は今回が初めてである（長岡市「長岡市史 資料編1 考古」1992年）。

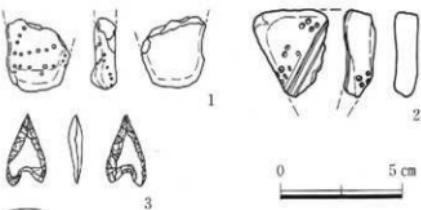
⑦土器底部 (第7図94~96)

土器作りの途中で土器の底面に敷台とした木葉（94）や歌物（95・96）の痕跡が見られる土器をまとめた。いずれも器壁の厚さから中期と思われる土器である。94に付着した木ノ葉の種類は不明である。95・96の底面の痕跡はアンギン編みの網代痕である。

(2) 土製品 (第8図1・2)

今回の調査で出土した土製品は、図示した土偶の腹部破片（1）と三角形土版の破片（2）だけである。土偶は列点文が腹部から脛腹にかけて施され、脚部を省略した河童形土偶八タイプに分類され、時期は火焔形土器が主体的な大木 8 a 式段階である（駒形敏朗『新潟県の縄文中期土偶』『土偶研究の地平』『土偶とその情報』研究論集（2）1998年）。

三角形土版は列点文と斜めの沈線が施され、背部が若干反っている。時期的には土偶と同じころと考えられる。



第8図 土偶（1）・三角形土版（2）・石鎌（3）

(3) 石器 (第8図3～第10図)

集落の縁辺部と思われる今回の調査地から出土した石器の種類と数量は報告書抄録のとおりで、石棒などの呪術的な石製品は出土しなかった。遺構出土の石器は1点もなかった。

・石鎚 (第8図3)

基部に抉りがある凹基無茎鎚に分類される石鎚である。基部の抉り度は0.30以上。両面に一次加工面を残して、縁辺部をていねいに打ちかいて刃部を作り出している。重さ10gである。材質はチャート。

・打製石斧 (第9図1～11)

短冊形と撥形とに分類される。完存品の計測値は長さ69～94mm、幅42～50mm、厚さ16～20mm、重さは80～90gである。石材は安山岩が多く、他にホルンヘルス(9)と頁岩が1点ずつある。なお、11は両側縁を打ちかいただけの打製石斧の未製品。

短冊形打製石斧(1～7)は、完存品1点(5)と欠損品9点(1～6)、それに未製品1点(7)の合計11点ある。刃部が遺存する打製石斧の平面形態は円刃が3点(2・4)と、完存品(5)の偏刃が1点、刃部の断面形は両刃が2点(2・3)と片刃が2点(5)である。欠損品の遺存状態は、基部側遺存が4点あり、基部側破損が1点(1)、中央部破損が1点(6・7)、刃部側破損が2点(4)、両端破損が1点。3点ある刃部側遺存は、中央部破損が2点(3)、刃部側破損が1点(2)である。

撥形(8～10)には完存品はなく、ほぼ中央部破損の基部側遺存が1点(8)、刃部側破損の基部側遺存が1点(10)、それに基部側のほんの一端を破損しただけのものが1点(9)ある。9の刃部は平面形態が円刃で、断面が片刃を呈している。10は磨製石斧から打製石斧に転用したものである。

・磨製石斧 (第9図12～18)

いずれも定角式の磨製石斧である。完存品はなく、破損品が12点と、未製品1点がある。石材は蛇紋岩6点、安山岩2点、砂岩2点、頁岩1点、不明が2点と、蛇紋岩の比率(46%)が高い。欠損品の遺存状態は、刃部側破損で刃部側遺存が3点(12)、中央部で破損して基部側遺存が4点(15～18)、刃部側破損で基部側遺存は3点(13・14)、両端破損が1点などである。刃部の形態は、刃部が遺存する2点ともに円刃の両刃である。また、12・15・16は側平面部に敲打痕が見られ、破損品を敲石に転用したものか。

・敲石 (第10図19)

偏平疊の敲石が1点出土した。長さ97mm、幅56mm、厚さ23mm、重さ190gを測る。上端と側縁部に敲打痕が残る。面的なツブレが複合し、多面状で大きなツブレがある。

・凹石 (第10図20～28)

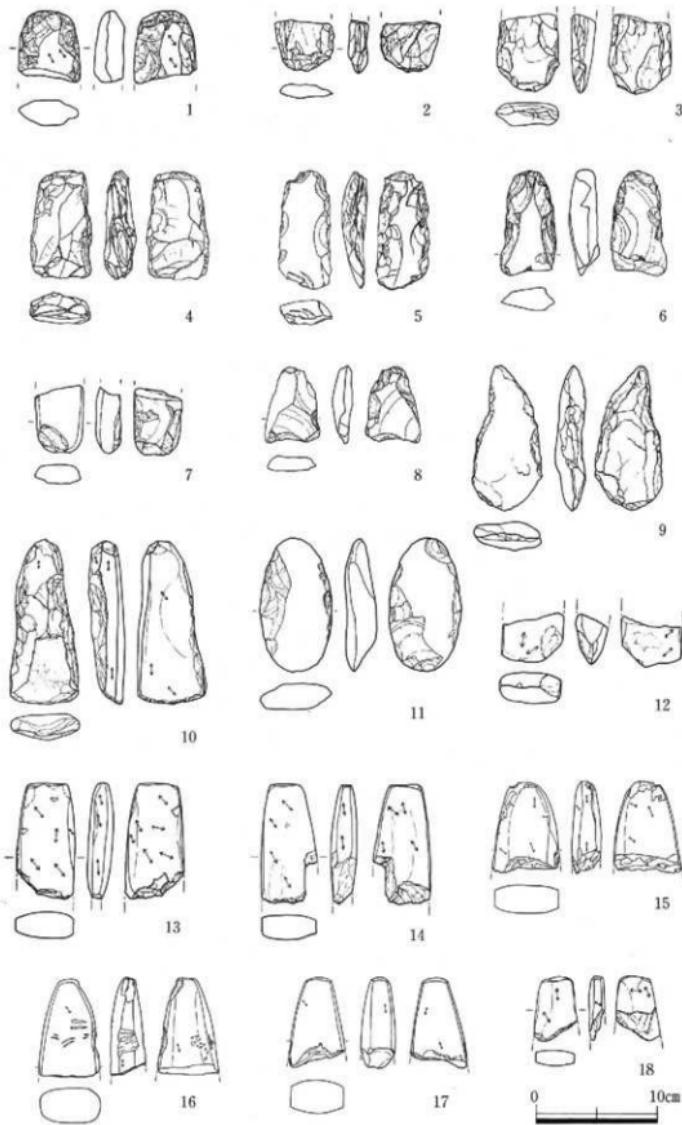
21点の凹石は、いずれも扁平疊の凹石である。使用痕の状況は、両面が単独の深いくぼみが2点(20)、両面とともにアバタ状を呈するものが7点、アバタ状と単独の深いくぼみが1点(21)、アバタ状と複数の深いくぼみが3点(24・26)、単独の深いくぼみと複数の深いくぼみが2点(22)、両面とともに深いくぼみのものが5点(23・25・27・28)に分けられる。磨石と複合する凹石(21・24)と縁に敲打痕があるもの(22・26)もある。石材は安山岩。

・磨石 (第10図29)

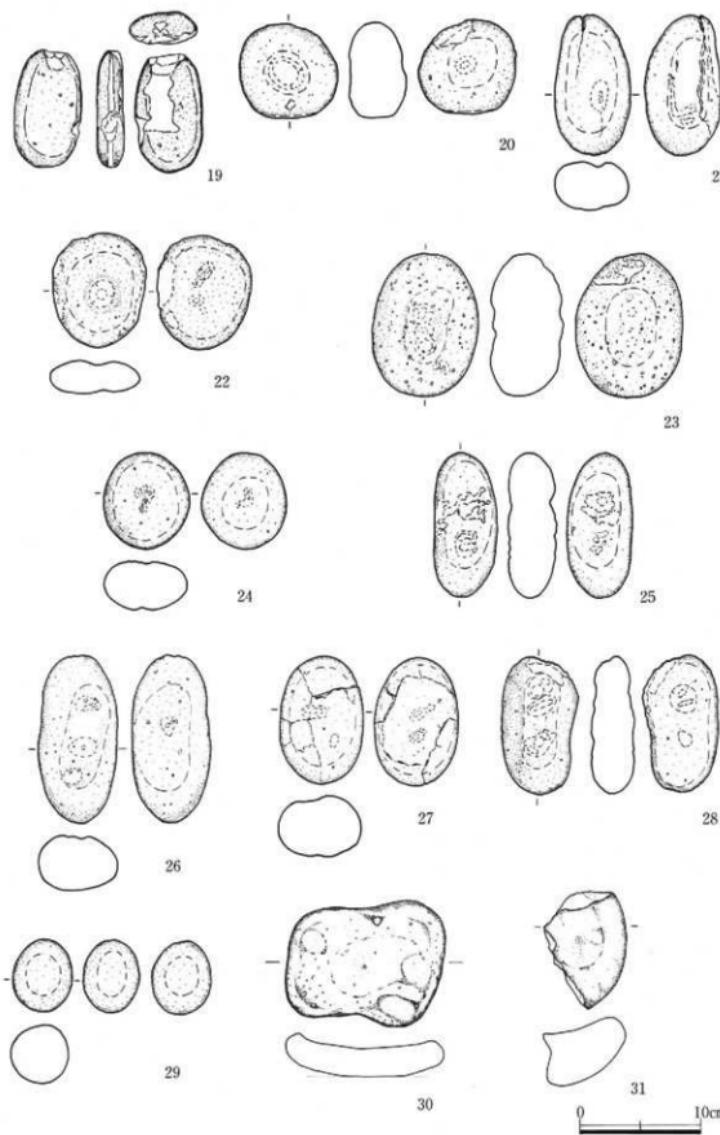
安山岩の磨石である。重さは190g。縁面に敲打痕が見られ、敲石としても使用されたと思われる。

・石皿 (第10図30・31)

3点出土した石皿は、扁平な自然疊をそのまま使用した安山岩製の小形石皿である。いずれも片面のみに使用痕が見られる。完存品は2点(30)である。



第9図 石器(1)



第10図 石器（2）

8 まとめ

今回の発掘調査では落とし穴のトラップピット4基、100kg近い縄文土器、土偶・三角形土版の土製品、打製石斧・磨製石斧・凹石などの石器類が出土した。縄文土器の出土位置は指定地側に片寄っていた。そして、遺物出土域を取り囲むように4基のTピットが位置していた。馬高集落の形態については、前に小熊博史が「8」の字に連環する形態を推測している（小熊1991年『前掲書』）。小熊の推定集落図に今回の遺物出土範囲を重ね合わせると、今回の調査地は馬高集落の東側縁辺部に相当することが判明した（第3図左図）。このことはボーリング調査などから行政的に行われた馬高・三十塙遺跡の史跡指定範囲を、東側の一部であるが発掘を伴う調査データーから裏付けることになった。

次に出土遺物から考えられることを2・3記してこの項を締めくくりたい。まず、土器であるが、出土した縄文土器は、火塙形土器の縄文中期中葉前半（大木8a式段階）が出土量の大半を占め、火塙土器の馬高集落の主な時期であるとの傾向を今回の調査でも濃く表していた。次いで中期前葉、それに中期後葉が続き、そして1～2点ではあるが後期の前葉と中葉の土器が出土している。地域ごとの傾向としては、中期前葉段階では北陸地方の影響を色濃く受け、中葉になると東北地方の影響下にありながら火塙土器で代表される在地の土器が主流になり、中葉の後半（大木8b式段階）から後葉になると東北地方の影響が強くなる。

次に磨製石斧から交易などを考えてみよう。13点出土した磨製石斧の石材のうち、蛇紋岩が半数近くを占めていた。縄文中期の蛇紋岩製の磨製石斧は、糸魚川市長者者が原遺跡をはじめ、富山県との県境付近では磨製石斧を生産した遺跡が確認されている。主に縄文中期中葉の地域を対象にした長岡市柄吉町中道遺跡第1次調査で出土した磨製石斧の半数以上が糸魚川方面生産の蛇紋岩製であった（木島勉氏教示、駒形敏朗「中道遺跡－第1次調査－」長岡市教育委員会 1995年）。おそらく、今回調査で出土した蛇紋岩製の磨製石斧も、糸魚川方面で生産された磨製石斧そのものが運び込まれたものと思われる。

蛇紋岩製磨製石斧の生産拠点がある糸魚川市はヒスイの产地でもある。硬玉製大珠は縄文中期に時期がほぼ限定される遺物で、長岡市内では岩野原や中道などから出土している。岩野原では磨製石斧の石材を検討しなかったが、検討した中道では蛇紋岩製の磨製石斧の比率が高い。その中道では3点の硬玉製大珠が出土している。これまでのところ、馬高から硬玉製大珠の出土は報告されていないが、中道の例を参考に考えると、馬高にも硬玉製大珠が存在する可能性はあるものと思われる。近い将来予定している復原・露出展示予定遺構の位置などを採る試掘調査で、検証したいことがらの一つである。

また、今回の調査では指定地寄りの遺物出土範囲から、拳大から人頭大の河原石が多数出土した。しかし河原石は遺物出土範囲を外れると1点も出土しなかった。集落跡と河原石との関係については、今回調査の目的の一つに上げていた。出土遺物は縄文土器の破片が約40点と打製石斧1点で、遺構は1カ所も確認されなかった1995年の市道（西幹線77号線）の発掘調査では河原石は1点も出土せず、市道建設地は馬高の集落を外れている可能性が高いことを指摘し、馬高集落を発掘する機会に確認したいことに上げておいた（駒形1996年『前掲書』）。これは縄文集落全体を対象にした岩野原や中道の発掘調査では、ダンブトラック数台分にも上る大量の河原石が出土し、発掘の妨げになるほどであった。今回の発掘で河原石が出土した地域は、前述のように遺物の出土範囲とほぼ重複しており、1995年の調査で推測したことと同じ傾向を示していた。河原石の存在は縄文集落との関係において何らかの関係があり、縄文人が河原石を大量に集落内に用意することの意味についても考えてみたい。このことも今後予定している馬高集落を対象にした試掘調査で追加確認し、集落と河原石との関係をより明らかにしたいことがらである。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しせき「うまだか・さんじゅういなばいせき」りんせつち							
書 名	史跡『馬高・三十稲場遺跡』隣接地							
副 書 名	環境整備事業に伴う発掘調査							
卷 次								
シ リ ーズ 名								
シ リ ーズ 番 号								
編 著 者 名	駒形敏朗							
調 査 機 関	長岡市教育委員会							
編 集 機 関	長岡市教育委員会							
所 在 地	長岡市柳原町 2番地 1							
発 行 年 月 日	1999年 3月25日							
ふりがな 所 収 遺 跡	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡『馬高・三十稲場遺跡』 隣接地	長岡市関原町 1丁目字中原 3000	15202	18	37° 26'	138° 46'	19980901 ～19981013	1,385	駐車場建設
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
史跡『馬高・三十稲場遺跡』 隣接地	集落跡	縄文時代中期	Tピット4基	縄文土器8,514点(96kg) 土偶1、三角形土版1、 石鏃1、打製石斧15、 凹石21、磨石1、石皿3				



調査地（車から）



調査地（南から）



表土発掘



埋め戻し



包含層発掘



造溝発掘

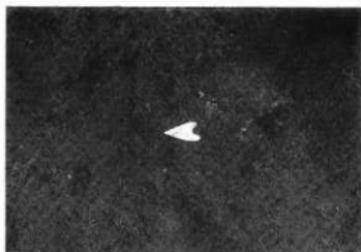


TP 1. 発掘



実測

写真1 調査地・発掘風景



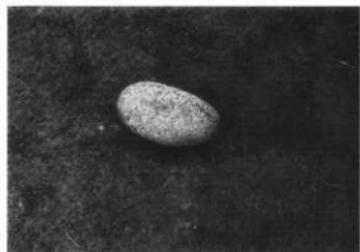
石鏃



打製石斧



磨製石斧



凹石



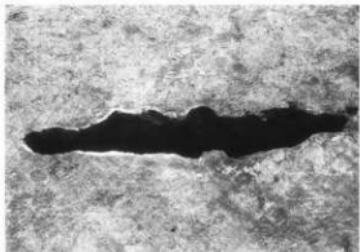
T P 1



T P 2



T P 3



T P 4

写真 2 遺物出土状況・遺溝

史跡「馬高・三十福場遺跡」隣接地 一 環境整備事業に伴う発掘調査一

平成11年3月20日印刷 平成11年3月25日発行

発行：長岡市教育委員会 印刷：㈱北越時報社
